

ケーブルテレビのコミュニティチャンネルの事例： 株式会社ベイ・コミュニケーションズ

一般財団法人研究学園都市コミュニティケーブルサービス (ACCS) 理事長 太田 秀也

個別のケーブルテレビ局のコミュニティチャンネルの番組内容や制作体制について取材等により取り上げているが、今回は、株式会社ベイ・コミュニケーションズについて紹介することとした。

1. ベイ・コミュニケーションズについて

株式会社ベイ・コミュニケーションズ（代表取締役社長竹間郁夫氏、本社所在地大阪市福島区、以下「ベイコム」と記す）は、1991年4月1日に設立され、大阪市（福島区・西淀川区・港区・大正区・此花区・西区・浪速区・西成区・住之江区・北区/中央区の一部）、尼崎市、西宮市、伊丹市をサービスエリアとする会社である（役職員数279名（うち役員6名）、職員はほとんど正社員（2026年3月時点））。

主な事業としては、放送、インターネット、でんき等のサービスの提供を行っており、売上額は約163億円、加入世帯は約59万世帯（2024年度）である。

放送事業としては、地上デジタル放送FMラジオ放送、BS放送、多チャンネルCS放送に加え、コミュニティチャンネル（ベイコムチャンネル）がある。



ベイコムのメディア営業部の皆さん

2. コミュニティチャンネルについて

(1) コミュニティチャンネルの番組内容

3で紹介する番組のほか、下記のような制作番

組がある。

- ・「チームベイコム」（地域の話題・イベント情報などを紹介する地域密着情報番組。週1回更新）
- ・「週刊Bayニュース」（週1回更新）
- ・「タイガースV特急」、「オリックス・バファローズが好きやねん！」（選手インタビュー等を中心に球団紹介。週1回更新）
- ・「プロ野球ファーム中継2026」（プロ野球2軍戦を中継）
- ・「わが社へようこそ」（街で活躍するジモトの会社を紹介する番組。月2回更新）
- ・「挑め！ぶかつ道」（学校部活を体験取材。毎月2週目のチームベイコム内のコーナーで放送）
- ・「阪神電車オススメ 駅前てくてくさんぽ」（阪神電車駅前のスポット等を紹介。月1回更新）
- ・「わがまちの風景」（まちの風景を音楽とともに紹介。月2回更新）
- ・「このまち魅力調査団」（地域の偉人の人生をオリジナルの紙芝居で紹介。毎月3週目のチームベイコム内でコーナーで放送）
- ・「福丸がゆく」（落語家が街並みや歴史などを紹介。週1回更新）
- ・「武庫川探検隊」（武庫川下流から源流を目指す探検隊番組。年始に放送）
- ・「地域イベント・お祭り」（地域のお祭り、イベント、スポーツ大会等を紹介。不定期更新）
- ・「プライベート旅Stories」（様々なタレントが“写真を撮る”旅の番組。月1回更新）
- ・「ゆうゆう四季彩散歩」（関西近郊を訪れる旅行ナビ番組。不定期更新）
- ・「ラジねえ。と「あさラジ」」（1級ラジオ体操指導士による約3分のラジオ体操。月2回更新）
- ・「なつかしの昭和歌謡」（毎日放送）
- ・「HYPERDASH基地」（ミニ四駆番組。月2回更新）
- ・「サンサンシネマNavi」（映画館の上映作品をご紹介。月2回更新）

- ・「VIVA 映画祭受賞の短編映画たち」(国内・海外の映画祭受賞短編映画を放送。月1回更新)
 - ・「伊丹市広報番組「いたみだより」」(市政情報等の番組。月1回更新)
 - ・「夏 高校野球」(準々決勝、準決勝を生中継)
 - ・河川カメラ映像(ライブカメラ)
- (※ほかに「おまつりニッポン」「壮観劇場」等の購入番組等も放送している。)

(2) コミュニティチャンネルの制作体制

担当のメディア営業部は32名体制であり、うち番組制作を担当するのはメディアプロダクトチームの15名である。業務は一部委託している。

メディア営業部では、自主放送番組制作に加え、自社のプロモーション映像の制作や、外部の企業プロモーション映像の制作の受注等の業務も行っているということである。

また、制作においては、原稿作成、画像生成、編集補助、ナレーション等において、AI技術も積極的に導入されているとのことである。



メディア営業部の制作現場

3. 個別の番組について

以下、いくつかの番組について、その内容、制作方法などについて、ベイコムメディア営業部を訪問し(同部は兵庫県尼崎市に所在)、白井健一部長、岡根晋吾メディアプロダクトチーム長、吉澤剛サブリーダー、面高洋チーフに取材(2026年4月24日)した内容も交えて、紹介する。

(1) このまち夢いっぱい

i) 概要

沿線で様々な社会貢献(SDGs・福祉・教育等)に取り組む団体や個人にスポットを当て、市民活動の認知と共感を広げ、持続可能な社会の実現を目指す番組(2019年4月開始)。阪急阪神ホールディングスグループが社会貢献活動として支援する地域団体への取材などグループ企業で連携した企画にも取り組んでいる。15分枠。月2回更新で、2026年3月末時点で168本の番組が放送されている。

ii) 制作方法等

担当社員とパートナー企業で協働して制作。

公式YouTubeチャンネルでも配信(チャンネル登録者数 約560人)。阪急電鉄や阪神電車の沿線情報誌等にも掲載歴あり。

iii) 番組内容例

2026年2月放送「障がい者雇用と多様な働き方支援」では、パソコンの再生をする会社、ハウスでイチゴなどの栽培をする会社における障がい者の雇用や働き方を取り上げ、作業の細分化やマニュアル作成等の工夫により、障がい者の方が楽しくいきいきと働かれている姿が紹介されている。



(2) ジモレキTV

i) 概要

放送エリアを中心に、様々なジャンルにおける地域の歴史を紐解く人気の情報番組。地元大学の歴史学の名誉教授が地域を歩き、知られざる歴史を伝えることで、その地域に住む人々に、誇りと生きる力を持ってもらえることを目指す番組(2016年3月開始)。30分枠。毎月更新で、2026年3月現在で76本の番組が放送されている。

ii) 制作方法

大学名誉教授の持ち込み企画を、自社で制作している番組。取材先等も大学名誉教授が選定。ロコテレでも配信している。

iii) 番組内容例

2023年11月・2024年2月放送の「阪神なんば線出来島駅・大阪難波駅」(第50回日本ケーブ

ルテレビ大賞番組アワードコミュニティ部門奨励賞受賞)では、出来島の境界探しの街歩き、また道頓堀の端から端まで船での橋巡りを行い、昔の写真や歴史的遺構の紹介も交えながら、地域を紹介している。

iv) その他

制作にあたっての課題としては、歴史番組の宿命として、当時の写真や映像が残っていないことがあげられ、正確性を確認した上で、CGや生成AIなどを利用して、当時の様子が再現できるように工夫しているとのことであった。加えて、地域の歴史(伝承)は、公的な記録だけでなく、口伝や特定の家系の記録に基づいている場合があるので、言い回しや、資料の下調べなどが重要とのことであった。



(3) 歴史街道～わたしたちのまちの歴史と文化～

i) 概要

「歴史街道メインルート」(伊勢・飛鳥・奈良・京都・大阪・神戸)にサービスエリアを持つ各ケーブルテレビ局(10局)が、リレー形式で共同制作している紀行番組。広域的な歴史文化のネットワークを視聴者に認識してもらうことを第一の目的に、教科書に載るような大きな歴史だけでなく、その土地に住む人々が守り伝えてきた「生活文化」や「伝承」にも光を当て、視聴者が自分の住む街に誇りを持てるような、身近な歴史遺産を掘り起こしていく番組(2007年10月開始。ベイコム制作の初回放送は2008年2月)。15分枠。月2回更新で、2026年3月前半放送分で439本の番組が放送されている。

ii) 制作方法

歴史街道沿道のCATV局が持ち回りで制作。

ベイコムでは社員とパートナー企業と協働して制作(4カ月に1回)。

iii) 番組内容例

2025年11月放送の「港区100年」では、2025年に区ができてから100年になる大阪市港区を取り上げ、台風による水害で大きな被害を受けたため、港の浚渫の土砂で土地を2mかさ上げした上で、土地区画整理事業を行って港区のほ

ぼ全域を整備してきた歴史が紹介されている。その際には、当時の写真によって、かさ上げ前の土地の状況(土地に埋まる前のマンホールが見えている)や、街歩きによって、かさ上げ前にできた建物の状況(1階が現在の土地の下にある)を、わかりやすく伝える工夫がされていて、まちの歴史の変遷が感じられる番組となっている。



(4) その他

コミュニティチャンネルの今後の展開について伺ったところ、「あってよかった あったらうれしい ベイコム!」という同局のビジョン達成のため、地域情報を発信することに加え、リアルなイベント開催等を含め、自治体、地域団体と、より深く組み合わさった「地域課題解決型」のコンテンツ制作により、沿線価値を高める取組を進めたいということであった。

4. 若干のコメント

以上のように、様々なジャンルの番組が制作され、放送されている。なかでも地域に出かけ、紹介する番組も豊富である。

このうち、「このまち夢いっぱい」は、地域における様々な社会貢献活動を取り上げ紹介することで、ケーブルテレビとして、コミュニティ・メディアの機能を発揮している番組と思われる。

「ジモレキTV」は、地元大学の歴史学の名誉教授の歴史・鉄道オタク(?)的な大変詳しい地域紹介により、地域の隠れた魅力の発見につながり、地域への愛着を生み、地域への来訪につながるような番組になっていると感じられる。

「歴史街道」は、当時の写真や街歩きなどのよって、まちの歴史の変遷が感じられる番組となっている。また、広域のケーブルテレビ局(10局)が持ち回りで共同制作している点も注目される。

※本稿の内容は、筆者個人の見解であり、筆者の属する組織としての見解ではないことを申し添える。